

## “世界” とつながる「ことば」の学び（3 年次）

### 1 研究の内容

#### （1）これまでの研究

本部会では、多様な他者と関わり互いに理解し合おうとするとともに地球に生きる一市民としてグローバルな視点（世界の様々な文化や習慣、価値観を尊重し、様々な背景をもった人々と共に生きていくための広い視野）をもって考え行動しようとする子どもの姿を目指し、研究を重ねてきた。

#### ◇2018 年度～2021 年度「『世界』に生きる“わたし”」

子どもたちの外国語との出会いは「世界」との出会い、そして新たな見方による日本や日本語との出会いでありたいという願いのもと、世界の文化や人々を感じながら学習する外国語教育について考え、①「ことば」への「引っかかり」を広げる ②関わりの中で試行錯誤する ③「世界」を自分とつなげてとらえる の3つの視点を重点においた。

日本語と比べながら外国語（英語だけでなく）をとらえようとしたりことばの背景にある文化を考えようとしたりする姿や、外来語の由来から他言語と日本語との関係性に関心をもつ姿、国際的な課題（難民問題）への取り組みを通して国際問題に対して自分ができることを考えようとしたり行動を起こそうとするきっかけとなった様子を見ることができたことは成果と言える。同時に、グローバル・シティズンシップと言語教育の関係性や言語教育と国際理解教育が互いに影響し合う言語学習についての整理、そこに密接に関わる複言語主義の位置付けを明らかにしていくこと、その上で外国語の有効性や意味が子どもたちの生活や行動の中にどのように結びついていくのかを見とっていくことが課題として残った。

#### ◇2022 年度～「“世界” とつながる『ことば』の学び」

グローバル・シティズンシップと言語教育とのつながりを考えながら「ことば」の学びにフォーカスし、外国語を学ぶことで出会う様々な「ことば」を通して、子ども自身の“世界”が広がる、見える“世界”が新しくなる、“世界”と自分がつながることを実感する経験を大切に重ねていくことのできるような外国語の学びについて考えた。同時に、なぜことば、そして外国語を学ぶのかということ問いとした。

1 年目には、異文化間コミュニケーションを通して言語活動が活性化される場づくりと、複数の言語に触れることを通して異文化を理解しようとしたりことばに対する視野が広がったりするきっかけとなるような言語活動について考えた。留学生との交流会を通し、子どもたちがコミュニケーション能力（communicative competence）<sup>1</sup>における方略的能力（strategic competence）を働かせながら想いを伝え合おうとする様子や、日本語を外国語としてとらえ直す様子をみた。また、あいさつやオノマトペを題材として多言語それぞれの音や文字に触れる活動を通し、言語間の差異や言語の多様性への感受性が育まれる様相をみた。課題として、多言語に触れて言語の多様性を実感することをスタートとし、ことばから文化を知ったりその奥にあるものを感じようとしたりすることができるよう活動につなげていくことが挙げられた。

そこで2年目には、言語の多様性の実感から気づきへとつなげていくことを意識した。世界の言語数や種類、学習言語などについて知る活動をきっかけとし、あいさつや文字に触れる活動を経て、12ヶ月の表し方の多言語比較や新年の挨拶・過ごし方・祝い方の多様性を調べながら言語・文化間の相関性への気づきが生まれていく様子をみた。また、異文化コミュニケーションの視点では、様々な形で思いを伝える経験を積む中で、実際に行われた英語スピーチに触れてそれらを真似する活動を取り入れた。4つの異なるテーマ、英語使用のバックグラウンドもそれぞれに異なる話者のスピーチを取り上げることで、多文化共生を体感しながら、非言語的なコミュニケーションの方法を工夫したりして自身でも自信をもって表現していこうとする子どもの姿を見ることができた。

多文化共生のための外国語教育には「リアルを通して学ぶ」ことが不可欠であり、どのようなリアルと出会うかということが重要なポイントになるだろう。今後は、そうしたリアルに出会ったときに子どもたちが何に気づき、それまでのどのような経験と繋げたり活かしたりしながら、どのよう

<sup>1</sup> Canale & Swain (1980) など

にアクティブなグローバル・シティズンに育っていくのかについて考えていきたい。また同時に、そこに多言語学習がどのように関わってくるのかを整理していく必要があるだろう。

## (2) 今年度の研究について

現代の様々な技術の発展により、外国語の分野においても主に翻訳機能は様々なところで使用され、その精度もかなり高まってきている。こうした AI 時代における外国語教育の意義について考えたとき、異文化コミュニケーションを支えるものとしての役割が大きいと考えられる。言語はコミュニケーションの手段であり、感情やニュアンス、文化的なコンテキストの理解、非言語的なコミュニケーションなどにもとづく。コミュニケーションの相手との間に存在する微妙な感情やコンテキスト、文化的な背景などを理解し押し図りながらことばを適切に選択し、対話したりしながら相手との関係を構築していく。こうしたことに AI が取って代わることはできず、それらはわたしたちが様々な人とことばを使って関わる経験の中で身につけていく力であり、言語を学ぶ本質にもなり得よう。異文化コミュニケーションにおいてもその本質は変わらないが、同一言語でのコミュニケーションに対し、互いの文化的背景やコンテキストの理解などの重要性がより高まる。

こうした異文化や異なる価値観の理解や他国の人々と効果的にコミュニケーションを図ることは、多文化を受容する共生社会の礎となるグローバル・シティズンシップの考え方においても重要な役割をもつ。そこで、言語を通して、異なる文化や価値観、歴史に対して寛容な態度、他者を尊重する姿勢が育まれていくような授業や活動をデザインしていく必要があると考える。そうしたときに、上述したような「リアルを通して学ぶ」ことを重点として据え、実際に様々なひとやものとの関わりを積極的に取り入れていくことを意識したい。

また、いまだに日本社会の中に根強く残る「英語の使い手＝グローバル人材」という発想についても問い直し、言語の価値観や考え方を広げられるよう、言語の多様性や複言語主義に関わる実践に取り組む。

## (3) 「学びをあむ」との関連

外国語の学びにおける主体性は、子ども自身が外国語や世界についてもっと知りたい、分かるようになりたい、外国の人々と分かり合いたいと願うところから生まれると考える。「学びをあむ＝自分の思いを大切に、様々なひと・もの・ことと関わりながら新たなものを創り出し、自己を更新していく」というのは、上記で述べたような様々な外国語や人々との出会い等を通して感じたこ

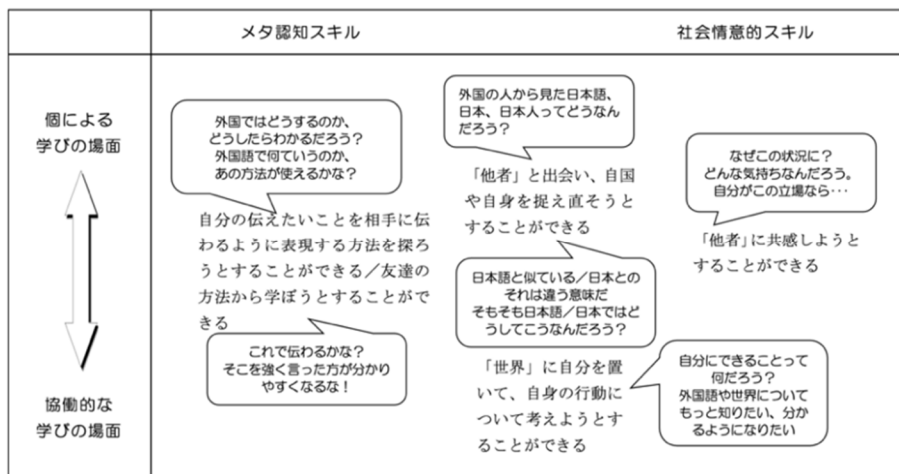


図 1 外国語の学びにおけるメタ認知スキル・社会情意的スキル

と、考えたことをもとに、子どもたちが自身のことばや文化、考え方を見つめ直し、そこで生まれる新たな視点でまた学びを重ねていくこととつながると考える。その中で自身の考えやそれまで当たり前前と思っていたことが揺らいだり崩れたりすることもあるが、そうした経験も、「あみ直し」によって自己の更新、問いの更新となり、さらなる探究へと学びが発展していくと考えられる。外国語の学びにおいて育成されるメタ認知スキル・社会情意的スキルについては上の図に示した。母語におけるメタ言語能力を働かせながら、外国語やともに世界に生きる人々について思いをはせたり問いをもって探究していったりする姿を期待したい。そのために、子ども自身が立てた問いについて、探究の仕方を自身で計画し学びを進めていくことができるような場を保障していく。

## 2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

### (1) 留学生との様々な交流を通し、世界とのつながりを感じる（第 5 学年）

12 カ国からの留学生と 2 ヶ月にわたり計 3 回の交流会を行った。小学生 3～4 人と留学生 2 人（2 カ国）が一つのグループとなって継続的に交流した。それぞれの内容は、以下の通りである。

### ◇第1回 出会い／日本文化やお茶小の紹介

中国語、韓国語、英語、フランス語といった子どもたちに馴染みの深い言語の他に、インドネシア語、キルギス語、台湾語、トルコ語、ベトナム語、ポーランド語、ルーマニア語とも出会った。留学生にとっては外国語である日本語で自分達と交流してくれるということを聞くと、子どもたちは、「せめてあいさつと自分の名前くらいは留学生の国の言葉で伝えよう！」と、繰り返し音声を聞いたりグループの仲間と音を確認め合ったりして一生懸命練習していた。そしてむかえた交流会では、緊張しながらもそれぞれの言語で自己紹介を行い、留学生が喜んでいるのを見て嬉しそうにしている姿が印象的だった。



留学生の母語での歓迎ポスター（子ども作成）

### ◇第2回 ミニ国際会議：世界での課題について考える

昨今のニュースや家庭科で学習をしていた SDGsなどを想起し、世界で起きている問題や国を超えて取り組むべき課題について考え、「ミニ国際会議」として留学生と話し合った。子どもたちから挙がったテーマは、地球温暖化／貧困や飢餓／海に関わる環境問題／戦争と平和／人や国の不平等／食糧問題であり、それぞれの現状と日本や世界の取り組みについて調べて留学生に示し、留学生の国での取り組みを聞いたり自分たちにできることについて話し合ったりした。例えば、ポーランドのスーパーマーケットで野菜などが必要な分だけ量り売りされていることを知った C 児は、それが食品ロスを減らすことにつながることに気づき、「日本でもそのようなスーパーを増やすなど、他の国と真似し合って改善するべきだと思う」とふり返った。また、貧困や難民の問題についてイギリスからの留学生と話し合った T 児は、その問題の難しさを痛感しながらも「実際に取り組めなかったとしても（アフリカの人々のために安定した職業、世界の子供がちゃんとした教育を受けられるように法律を作るなど）支援所でのボランティアや、寄付をするだけでも助かる子どもたちがいることを話し合ってた実感した」とふり返った。他にも、「小さなことでも世界中の人が話すことが成功につながる」「ニュースなどから情報を得て、関心を持ち、今から始められることからやる！」など、世界の課題を自分事として考えようとする様子が見られた。



環境問題への取り組みについて  
話すなかで太陽光パネルを紹介する

### ◇第3回 留学生の国について知る

留学生から、「ミニ〇〇語講座」を含めた出身国紹介をしてもらった。留学生が小学生に伝えたい母国の自慢や誇りに思う文化について多くの写真とともに話すのを聞いた子どもたちからは、「日本と違いすぎる気候に驚いた。土地と文化が結びついていることが実感できたし、西と東で文化が全く違うように見えた」といった気づきや、「中国の紙幣には、（中略）毛沢東さんが、すべての紙幣に写っている。（中略）日本の硬貨や紙幣に書かれている場所は、どこかもわからないので、まず自分たちのことを知っておきたい」といった自国の文化を見つめ直そうとする様子が見られた。また、「台湾は中国と台湾語で一般的に中国語が使われているため、台湾語は少ししかできない人が多いと聞いた。どのような場面でどちらの言語が使われているのか興味がある」といった言語に関するふり返りもあった。中には、「自分は、日本から出たくない。つまり海外旅行をしなかったのですが、今回の交流会で、海外（外国）に興味を持ちました」というものもあった。電車に興味関心の深い本児は、台湾の地下鉄や IC カードなどについての紹介があったことにより、少しずつ外国に身を置く自分を想像することができたようだ。

こうした外国に生きる人々との交流が、うまくいかなかったことを含め肌で感じたことを大切にしつつ子どもたち自身がこれからさらに異文化コミュニケーションの本質にせまっていくことができるようなきっかけとなることを期待したい。

#### （2）個々に外国語を追究しながらアプローチの仕方を探ったり気づきを得たりする（第6学年）

子どもたち自身のアプローチで外国語の世界にアクセスしていくことをねらい、月に一時間ほどの頻度で、外国語についての個の学びを広げたり深めたりする時間を設けた（My Language Time）。教師から示した条件は、①興味のある外国語について、ある程度継続的に行うことのできるテーマを設

